

Culture
Critique
Books



1985年

続ジョージ・オーウェル「1984年」

ジェルジ・ダロス 著

野村美紀子 訳

1985年

(続ジョージ・オーウェル「1984年」)

1984年10月20日 第一刷発行

定価1500円

著者

ジェルジ・ダロス

訳者

野村美紀子

装丁

古賀大介 (MOS)

企画

カルチャー・クリティーク編集会議

発行所

株式会社柘植書房

東京都千代田区神田神保町一—四六—二

電話 (〇三) 二九一—〇九九一 振替東京三—四三二八七

印刷所

株式会社太平印刷社

製本所

文勇堂製本株式会社

©1984 TSUGE SHOBO, Printed in Japan

★乱丁・落丁はお取り替えます。

続ジョージ・オーウェル「1984年」

ジェルジ・ダロス 著

野村美紀子 訳

György Dalos

NEUNZEHNHUNDERTFÜNFUNDACHTZIG

Ein historischer Bericht
(Hongkong 2036)

Aus dem Ungarischen von * * *

Copyright © Rotbuch Verlag Berlin, 1982.

Japanese translation rights
arranged with Rotbuch Verlag GmbH
through The English Agency (Japan) Ltd., Tokyo.

一九八五年●目次

- 1 ビッグ・ブラザーの死去にかんする医師団の公式報告書——11
2 訂正文二点——13
史学者による序——16

春

- 3 タイムズ文芸版の創設／ウィンストン・スミス——22
4 同／ジュリア・ミラー——28
5 同／ジェイムズ・オブライエン——32
6 あるオセアニア兵士の歎きの歌／デイヴィド・アンブルフォース——38
7 デイヴィド・アンブルフォースの詩をめぐる公開討論会／オブライエン——40
8 同／ジュリア——42
9 同／スミス——48
10 ビッグ・シスターの死／オブライエン——52

29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11
同／スミス——104	いわる「ハムレット反乱」の背景／オブライエン——107	同／スミス——104	「ハムレット」の初演／ジュリア——101	「デンマークの王子ハムレット」初演の公示——99	TLS編集局の横顔／ジュリア——91	TLS編集局の活動／スミス——84	テレスクリン体操について率直に語る（一九八五年四月二〇日付TLS論説）——89	キャサリン・スミスよりウインストン・スミスあて私信——82	オセアニア国民の私生活の原則にかんする公報——80	別れることのむずかしさ（掌篇小説）／リトコル——77	離婚許可の準備／オブライエン——74	J・Mのためのソネット／デイヴィッド・アンプルフォース（一九八五年四月一四日付TLSに発表）——72	同／スミス——67	月曜クラブの集会／ジュリア——63	ビッグ・シスター死後の政治情勢／オブライエン——60	きこりの寡婦——57	公報二点——55	同／ジュリア——53

夏

30	ビッグ・ブラザーの政策評価についての公報	114
31	ビッグ・ブラザー批判の結果／オブライエン	116
32	パーソンズの死／ジュリア	119
33	パーソンズのT L S 編集局宛遺書	122
34	パーソンズの埋葬／スミス	124
35	ユーラシア和平代表団の到着／オブライエン	126
36	ユーラシアの女性ジャーナリスト マリーア・コーエンの訪問／スミス	131
37	同／ジュリア	136
38	マリーア・コーエンのオセアニアについての連載記事の断片（一九八五年七月）	138
39	平和条約締結の結果／オブライエン	140
40	オセアニアの経済状況にかんする公式訂正文	143
41	ささやかな提案（一九八五年八月中旬発行のT L S のいわゆる「経済改革特集号」に載ったホワイタースの論説）	145
42	食肉危機解消の努力／オブライエン	146
43	歌手アンプルフォースのデビュー／ジュリア	149
44	知的改革委員会の十項目綱領	155
45	私事にかんするスミスの回想	161
46	人質事件／オブライエン	164

47	人質事件にかんする公報	168
48	一九八五年八月一八日の知的改革委員会議事録	170
49	I R A との決裂／ジューリア	173
50	人質事件の結末／オブライエン	175
51	ムハンマド・スタンレーとの会見／スミス	178
52	訂正文および懸賞募集文	182

九月

53	オセアニア政体の崩壊／オブライエン	186
54	オセアニアの体制の崩壊／スミス	190
55	ムハンマド・スタンレーのラジオによるロンドン市民へのよびかけ（一九八五年九月二日）	195
56	革命の日々／スミス	197
57	革命中の壁の落書き	202
58	オセアニア臨時政府の布告	209
59	革命の敗北／スミス	212
60	新体制の強化／オブライエン	220
61	新体制におけるわたしの役割／ジューリア	225
62	新体制の強化／オブライエン	227
63	スミスの恩赦とムハンマドの死／スミス	229

登場人物

オブライエン——回想録作者のひとり、もと思想警察高官。

ジューリア——回想録作者、スミスの恋人、スミスとともに改革運動を進めるが、のち別れて新政府に参加する。

スミス——回想録作者、革命鎮圧後逮捕され死刑の判決を受ける。

ホワイタース——経済学者、ジューリアとともに新政府に参加する。

パーソンズ——歴史学者、革命前に自殺する。

アンブルフォース——詩人、シンガーソングライター、テレビのスタジオで歌っているとき、ユーラシアの占領軍兵士に射殺される。

サイム——言語学者、哲学者、革命敗北後スミスとともに隠家にひそみ、新聞の発行を続ける。ユーラシア占領軍に街頭で殺される。

ムハンマド——イスラム教徒プロレによる革命のリーダー、逮捕され処刑される。

著者による用語説明

ジョージ・オーウェルの『一九八四年』に直接依拠する概念

当外局——国家党の平黨員

イングソック——国家党の公式理論

平和省——戦争担当省

思想警察——秘密警察、政治警察

党内局——国家党の幹部

青年反セックス同盟——国家党の青年組織

ニュースピーク——イングソックの理念によって豊かになり更新された言語の呼称

プロレ——学問のない労働者の呼称

スパイ団——党の児童組織

蒸発する——肅清する

勝利——製品や公共施設の名の前によく付けられる語

豊富省——経済担当省

真理省——内務省

二重思考——あらゆるものごとをふたつの側面から考えようとする党の新しい思考形式

一九八五年

報告書（二〇二六年 ホンコン）

Ⅰ ビッグ・ブラザーの死去にかんする医師団の公式報告書

一九八五年一月三日、ロンドン——ビッグ・ブラザーの健康状態回復のために召集された国家特別医師団は下記のとおり報告する。前年の十二月二日に、特定の内臓のある種の機能障害に関連する一時的不快がビッグ・ブラザーを襲った。国家特別医師団は、患者の症状改善のため、右腕と左脚を一時的に切り離させた。同時に左腎臓を一時的に遮断するための処置がなされた。

ビッグ・ブラザーの病状はその後安定し、タイムズの社説を読ませて聞くまでになった。だがふたたび悪化したため、社会的職務担当者を加えて総勢二五〇名を数えるにいたった特別医師団は、われらの愛する指導者の左脚も一時的に切断することを決めた。

この手術およびその後の輸血の効果は明らかに認められ、われらの指導者は若い日の闘争の

歌を聞きながらやがて睡りにおちた。

壊疽を起した左腕を切断したのち、ビッグ・ブラザーはラジオを通じて三分間訓辞を行い、ユーラシアの野蛮な海賊的戦闘機に対してオセアニア空軍が折しもおさめた勝利を祝う戦勝祝賀行事を、ビッグ・ブラザーの一時的不快をはばかりことなく挙行するようオセアニア国民に求めた。右肺の一时的遮断によって症状は改善された。一月五日には状態に変化はみられなかった。一月六日危篤状態、一月七日危篤状態のまま変化なし、一月八日危篤状態変化なし、一月九日、医師団の全員一致の決定により患者の左腕が切断された*。

一月一〇日〇時三十分いつとき不快を訴えたのちビッグ・ブラザーは世を去った。

* この時オセアニア史上一九六〇年以降はじめて採決が行われたことは周知のとおりである。この記録にしたがえば、ビッグ・ブラザーには左手が一本余分にあつたことになつてしまうが。あるいは実際に二本左手があつたのだろうか？——史学者註（四行目に「右腕と左腕を一时的に切り離させた」とあり、さらに数行後に「左脚も一时的に切断……」と記されているのも、あきらかにおかしい。これは公文書の誤読であろうか、それとも史学者の転記ミスであろうか。——訳者付記）

2 訂正文二点*

* これが、結局はオセアニアとユーラシアとの間の平和をもたらした——その結果残る世界大国であるイースタシアとの関係は緊張が高まったが——歴史書に「取消し外交」と記述されているキャンペーンの開始であった。これにかんして当時次のような小咄が語られていた。一九八五年の二月にはオセアニア国民がふたり道で会々と、挨拶は決まり文句の「なにかおもしろい話はないか」ではなく「なにが訂正された？」だった。——史学者註

A

オセアニア通信社ONNAは所轄官庁より委任を受け、以下のとおり報道する。ユーラシアの特定の報道機関は、カナリー諸島付近の空域におけるかれらのいわゆるオセアニア空軍「殲滅」

にかんする虚偽の偏向した風評をひろめている。この件にかんし、オセアニア通信社ON Aは以下のとおり発表しなくてはならない。すなわちこれらユーラシアの虚偽の風評はまったくのでっちあげであり、事実無根である。このようなことは交戦状態にある両国の関係改善に、すなわち戦時下の困難な時局を考えれば緊急に必要なとされるはずの係争点の可能なかぎり速やかな調整に、資するものではないのである。

B

オセアニア通信社ON Aは所轄官庁より委任を受け、以下のとおり報道する。イースタシアの特定の報道機関は、ユーラシアの海賊的戦闘機によるオセアニア空軍のかれらのいわゆる「殲滅」にかんする、われわれが編集したとかれらの称する訂正を、これが上記「殲滅」——じつは卑劣な中傷にすぎない——の間接的承認であるかのように、誤りかつは偽って述べようとしている。さらにかれらは、オセアニア政府がユーラシア政府に対してかれらのいわゆる——じつはそんなことは問題にもなりえない——「平和を熱望する身ぶり」をとり、それゆえイースタシアとの同盟条約の廃棄を通告しようとしている、と宣伝している。このような中傷と偽りはオセアニア・イースタシア間の友好関係に悪影響を与え、わが国政府は停戦交渉を開始する

準、備がある、と敵国ユーラシアに信じさせる役にしかたないのである。

* 強調はタイムズによる。——史学者註